

## 「こころ」について

心理学助教授 佐方 哲彦

私は、ことばの語源やその変遷をたどるのが好きである。先人たちがどうしてそのことばを当てたのか、なぜそのように言い表わそうとしたのかを知ることによって、人間の素朴で自然な心の営み、体験に近いものの見方がわかるからであり、さらには、ものごとの本質を知るヒントが得られることもあるからである。

たとえば、私の専門領域である「こころ」の語源をたどってみると、「コル」に行き着く。これはもともと獣禽類の臓腑の様態を指すことばであり、それが人間の内臓の様態の意味に転じ、さらに現在の意味へと変化したという。つまり、かつて人間は「こころ」を身体の中に実在するモノと考えていたことがわかる。西洋文化圏でも同様に、中世には、身体に実在する「こころ」は死ねば魂となって抜け出ていくから、その重さを物理学的に測定できると考えて臨終間際の人を秤に載せて看取った聖職者たちがいたそうである。ちょうど科学が一方の普遍的真理として台頭してきたころのことである。

また、「こころ」には、心臓の象形文字である「心」という漢字が当てられているが、それは「こころ」の現象は体験的に心臓の働きとして理解するのが素直で理にかなっていたからだと考えられる。「あたま」で思考していることはわかっても、それは静的で間接的な働きのような感じがするのに対して、「こころ」の営みから生まれる感情は心臓の動きとして直接的、実感的に体験されやすいのである。さらに、心臓は身体を中心に近いところにあるし、獣禽などを捌いていて心臓が止まれば死ぬことが目に見えてわかったから、「こころ」の所在を心臓に求めたのであろう。

このように見ていけば、「こころ」は脳の働きであるという自然科学の学術的事実が、体験から遠い知識にすぎないと感じる人たちがいるのも無理からぬことだとわかる。「こころ」を客体化し科学的に理解しようとするれば、「こころ」は脳および神経の作用にすぎないのかもしれないが、「こころ」をもつ主体として「こころ」を体験的にわかろうとするとどうなるのだろうか。こうした体験に近い人間の思いも大切にしてほしいと思う。